

国学研究序説〔一〕

北京大学研究所国学門について

阿 川 修 三

一、はじめに

周知のごとく、中国では、漢以来、学術は永い間經学を中核として発展変化してきた。清代に至り、諸子学、史学も発達してはきたものの、それらも、經学の桎梏から完全には解き放たれたわけではない。ところが、1911年、辛亥革命によって二千年来の王朝体制が崩壊し、經学を支える基盤に、大きな変化がおり、また、新文化運動を通じて、欧文の新思潮が流入する中で、經学を中核とする、伝統学術即ち国学⁽¹⁾もその形を根本的に変えざるをえなくなったのである。⁽²⁾既に清末から、伝統学術は欧文の学問に対して、国学と呼ばれ必ずしも絶対的なものではなくなっていたが、この国学がその後どのように変容を遂げたかは、中国文化、社会が社会主義革命を経た現在なおその伝統の桎梏の中にあることが明らかになりつつある今日、⁽³⁾極めて興味深い問題である。

私は、この変容の過程には、新文化運動の中から興る国故整理運動が重大な役割を果たしてきたのではないかと思う。だから、この伝統学術の変容を解明するためには、まず国故整理運動の全貌の解明から手を付ける必要がある。そして、その全貌の解明には、新文化運動の発源地である、北京大学での国学研究がいかなるものであったか、その解明から取りかかる必要がある。その場合、北京大学の国故整理運動の拠点は、1920年代初めに設置された、北京大学研究所国学門（以下、国学門と略称する）で

はないかと考え、そこから手を着けようとしても、決して不自然でない。なぜなら、国故整理運動の提唱者、胡適を始め、その同調者と思われる元『新青年』同人の銭玄同、劉復、胡適の弟子で、『新潮』同人の顧頡剛などが、この研究所において、『国学季刊』を始めとする紀要の編集、歌謡研究を始めとする主な研究課題などに大きな影響力を持っていたからである。つまり、彼ら国故整理派が国学門の性格を左右するだけの力を持っていたからである。そこで、北京大学での国学研究には、国学門の全貌を先ず明らかにすることから始める必要がある。そこで本稿では、国学門がいかなる研究所で、また国故整理運動においていかなる役割を果たしたかを、明らかにしたい。

これまで、国学門を始め、国故整理運動についての論考には、中国は勿論日本においても、疑古派についての若干のものを除き⁽⁴⁾、見るべきまともなものは殆どないのが現状である。また、国故整理運動に関する資料も、中国では、管見の限り、胡適、顧頡剛らこの運動に関わった人々のわずかな回想や、この運動に関係する雑誌類の彙報ぐらいのものであり、極めて少ない。一方、日本でも、『支那学』、竹内好らの『中国文学月報』（1935年3月～1943年3月）文化消息欄、また、吉川幸次郎、倉石武四郎ら、当時中国に留学した人々の回顧の文⁽⁵⁾に散見するに止まる。そのため、国故整理運動とは一体、どのような性格を有し、いつどのように起こり、無論、提唱者は胡適であることはいままでもないが、その提唱がどのように他に影響を与えて、運動として起こり、どのように終息していったか、という基本的なことすらはっきりしていないのである。

このようになぜ、国故整理運動はこれまであまりに論ぜられることが少なかったのか。その最大の理由は、中国での1949年以降の、国故整理運動の中心人物、胡適に対する、極めて否定的評価である。胡適は、周知のごとく、新文化運動で、文学革命を唱え、一躍脚光を浴びるのであるが、1919

年7月から12月にかけて、李大釗と「問題と主義」の論争を行い、マルクス主義による社会改造を目指す動きを強く批判した。以後彼は自由主義者として、マルクス主義には批判的であったが、軍閥、国民党政府にも距離を置いていた。それが、1930年代になると、国民党政府に接近し、以後その行政官僚として活躍し、共産党とは敵対関係となったのである。そのために、中国では、新中国成立後、特に1954年以降、胡適は、保守反動の権化であり、撲滅すべき典型的な人物とされ、彼に対する激しい批判運動が展開された。それは、その関係者にも厳しい批判が及ぶという徹底したものであった。その関係で、これまで、胡適の提唱した国故整理運動も同様に、マルクス主義に対抗する「反動的」な運動と決めつけられ、考究する価値などないとされてきたのである。しかし、中国ならばともかく、中国の学界の影響を受けやすい日本の学界といっても、理由はそれだけではあるまい。特に、日本においては、これまで当時活躍した学者も多く存命であり、棺を壺した後でしか評価の定まらない中国のことであれば、今、評価を出すことには時期尚早という、ためらいがあったのかもしれない。しかし、今日、中国では、近代化議論と相まって、胡適の評価は日益しに高くなってきている。そのため、評伝、日記、書簡などの関係資料も陸続と出版され、また、胡適は勿論顧頡剛をはじめとする弟子たちもほぼ鬼籍に入った現在、国故整理運動研究の環境は整備されたといえよう。

さて、これから国学門について、その概要、役割について述べていくのであるが、そのための資料としては、現在、日本では、『北京大学校史(1898~1949)増訂版』(北京大学出版社、1988年)、『歌謡週刊』、『国学季刊』、『北京大学研究所国学門週采』(以下、『国学門週采』と略称する)、『北京大学研究所国学門月刊』(以下、『国学門月刊』と略称する)などの国学門の紀要類、北京大学の公報たる『北京大学日刊』(以下、『日刊』と略称する)などしかない。⁽⁶⁾ 本稿では、それらに基づき、国学門の姿を明らかにし

ていきたい。なお、これらの資料は、その創立から、1927年頃までに集中し、それ以降については疏漏を免れない。しかし、まず、1925年9月に、清華学校（後の清華大学）に研究院が設立され、更に1927年11月、国学のナショナルセンターたる中央研究院歴史語言研究所が設立されるに及び、これまで国学の世界で、研究者養成機関、研究機関として唯一無二の存在であった、国学門も地位の低下は免れぬところとなったのである。ここでは、国学門が国学研究で重要な意味を持った時期についてさしあたり見ればよいのだから、1927年頃までの資料があれば、それで問題はなかろう。

また、論文の末には、日本国内では、僅かな数の研究機関にしか所蔵されていない、⁽⁷⁾国学門の紀要である、『国学門週報』、『国学門月刊』の総目次を付して、同学の参考とした。なお、同じく、国学門の紀要である『国学季刊』、『歌謡週刊』は、それぞれ影印本が刊行され、⁽⁸⁾また、それには総目次が付いているので、ここでは割愛する。

二、国学門の沿革

まず、国学門の沿革について簡単に触れたい。1922年1月17日、学長蔡元培の北京大学機構改革の一環として、将来大学院を設置することに備えて、研究所が新たに設立されることになるが、北京大学研究所国学門（以下国学門と略称する）は、その一部門として誕生をみる。⁽⁹⁾ただし、国学門の他に、当初、自然科学門、社会科学門、外国文学門の設立も予定されていた⁽¹⁰⁾が、予算の関係から、大学上層部が重視した、国学門のみが先ず設立となった。⁽¹¹⁾この国学門が、研究者の養成機関として、また、当然ながら、教員の共同研究機関として設立されたことは言うまでもない。

当時、北京大学は、反軍閥の拠点として、軍閥政府から、ことあるごとに目の敵とされ、予算を止められることもしばしばあり、そのため財政が⁽¹²⁾極めて緊迫していたにもかかわらず、国学門は、決して十分と言える額

とは言えないにしろ、予算面でその後も、大学本部からかなり優遇され、後述するごとく、その陣容を1924年頃までに次第に整えていったのである。

ところが、1927年7月、ついに、軍閥政府は北京大学を解散する暴挙に出て、北京大学を始めとする、北京の九大学を合併して京師大学校としたのであった。それに伴い、同年9月国学門は国学研究館に改組されたのである。これより以前から、国学門の主たる人々は、広州を始めとする南方へ逃れ、その活動は停滞したようである。⁽¹³⁾その後、軍閥政府は打倒され、国民政府が樹立され、大学区制施行の混乱を経て、1929年3月11日、北京大学が再建されるに伴い、国学門は復活した。1932年には大学院である、研究院が正式に設置され、国学門は研究院文史部に改組されたのである。更に1934年4月には研究院の規定が改正され、文科研究所となる。しかし、1937年7月、北京が日本軍に占領されると、北京大学は、清華大学、南開大学と連合して、長沙、昆明に移転を余儀なくされた。その間、文科研究所がどのような状態であったかは、現在知る術はない。中国が抗日戦争に勝利した後、1945年に文科研究所は再建されるが、その後、国共内戦もあり、混乱を極めていたようで、戦後については、新中国成立後の1951年に、『国学季刊』を第七巻の二冊刊行したことがわかるのみであり、当時文科研究所がどのような状態であり、その後どうなったかは、今のところ不明である。⁽¹⁴⁾

その所在地は、最初、北京大学第二院（景山東街）にあり、後に北京大学第三院（東安門北河沿）に移り、更に北京大学第一院（漢花園）に移った。⁽¹⁵⁾

以上の如く、国学門は中国現代史の荒波に洗われながら、その歴史を歩まねばならなかったのである。

三、国学門の組織と事業

〔一〕 国学門の組織

次に国学門の組織について、その概要を見ていこう。国学門には、所長、主任、助教、書記、事務員を置き、専任の副教授以上の教員は置かなかった。所長は校長が兼任し、主任は教授が併任で務めた。研究生の入学審査・修了審査を始めとする、国学門の運営には国学門委員会が当たり、委員会は、校長が兼務する委員長と、主任、教員の中から任命された委員から構成される。その下で主任が助教、書記、事務員の補助を受け、実際の国学門の運営に当たるのである。⁽¹⁶⁾

主任は、沈兼士が創設から文科研究所時代まで、長年にわたって務め、歴代の助教には、歴史学の顧頡剛、音韻学の魏建功、考古学の黄文弼などの後の碩学たちが務めた。また、創立当時の国学門委員会の委員は、委員長は校長代理蔣夢麟の兼任で、委員は、主任の沈兼士の他、顧孟余、李大釗、馬裕藻、朱希祖、胡適、錢玄同、周作人であった。当時は、胡適を始め、委員のうち新文化運動のメンバーが半数を占めており、このことから国学門が国故整理を指向するのは想像に難くない。

なお、国学門は、その組織は、設立当初の、事務室に当たる、登録室と、編集室、考古学研究室、歌謡研究室という規模から始まり、1924年までに整理檔案会、風俗調査会、方言研究室を加え、順次充実拡大していった。⁽¹⁷⁾

その規模は、はっきりはわからないが、登録室、編集室の他に、整理檔案会だけでも、陳列室十五室、研究室一室あり、考古学研究室以下にも、研究室の他に、各々陳列室がある⁽¹⁸⁾ところからすると、大学、研究機関の未だ整理されていない、当時としては、かなりの規模と言わねばならない。

〔二〕 国学門の研究部門とその事業

国学門の研究部門は、編集室、考古学研究室、歌謡研究会、整理檔案会、風俗調査会、方言研究会の六部門に分かれる。ここでは以上の各部門をその成立過程とその後の事業を中心に見ていく。なお、最後に、国学門全体

の事業として、通信員、月講を取りあげる。国学門の重要な事業である、研究生制度は後の章で述べることとする。

(1) 編集室

編集室は、I. 当学門の教員、導師、研究生の著作の刊行事務及び、『歌謡週刊』を始めとする紀要類の編集事務、II. A、当学門所蔵の学術研究の参考となる、器物、文件、書籍などの影印、B、『太平御覧』『太平広記』『藝文類聚』『一切経音義』の引用書目録、『中国学術年表』など、学術研究の参考となる各種工具書の編纂を担当した。⁽¹⁹⁾ そのうちに、Iでは、陳垣の『二十史朔閏表』、『中西回史日曆』などが刊行された。II-Aでは、『慧琳一切経音義引用書索引』のみが刊行され、他のものは原稿が完成しながら、資金が不足して未刊となった。

(2) 考古学研究室

馬衡教授が、1934年故宮博物院院長に転出するまで主宰し、その後は、胡適が兼任で主宰した

中国では、清末以来、スタイン、ペリオ、ヘディン、大谷光瑞、鳥居龍藏らなど外国人が考古学の発掘調査を行ってきたが、当研究室の設立当時、まだ、考古学という学問が、中国ではまだ草創期にあり、主に金石の研究が行われ、また全く経済的な裏付けもなかったので、中国人が独自に発掘調査することはなされていなかった。⁽²⁰⁾ そのため、考古学の研究は、骨董屋から買う出土文物に頼らざるを得なかった。しかし、それらはあくまで骨董であり、価格も高く、また商売上、出土場所、出土時期も伏せられることが多く、研究には極めて不都合であった。とはいえ、本格的発掘を行うには経済的に不可能なので、とりあえず、実地に古蹟古物の調査を行うための古蹟古物調査会を当研究室に1923年5月24日に発足させた。⁽²¹⁾ これは中国で最初の考古学の学会であった。翌年5月には古蹟古物調査会は考古学会と改称した。そして、中国人による、最初の考古学の調査に乗り出し

たのである。中国人が主宰した最初の本格的な考古学の発掘は、李済が1926年3月の山西省夏県の西陰村遺跡での発掘に始まると言われる⁽²²⁾が、この学会の活動はその先鞭をつけたものであった。

当学会が手掛けた主な事業は次の如くである。

遺跡の調査、発掘事業としては、1923年9月19日から10月初旬にかけて、馬衡が河南省の新鄭県、孟津県で出土した周代の器物の調査に赴き、多量の拓片、写真を、また孟津県の車飾りの銅器など90余種630余件を購入し持ちかえった。⁽²³⁾また、1925年夏、陳万里が敦煌に調査に行き、多量の写真を撮って帰り、1926年馬衡が朝鮮の樂浪郡の漢代の墓の調査を行った。⁽²⁴⁾1927年5月以降、数回スウェーデンの学者ヘディンと中国の学者との合同の西北考察隊に黃文弼らが参加し新疆で漢簡一万件を調査発掘し、陳受頤、蒙文通、傅斯年、孟森らがそれを整理した。この他に大宮山の明代の遺跡、洛陽北邙山の出土文物の調査なども行った。

また、文化財保護にも力を尽くし、旧清皇室が『四庫全書』や御物を売り払おうとしたとき、当学会が中心となって、内閣に抗議の書簡を送り、世論に訴えて、それを阻止した。⁽²⁵⁾

当研究室は、創立以来、古器物、文献資料の収集に努め、所蔵した金石、甲骨、などの古器物は五千余種、文献資料は二万余部となり、大学の創立記念日などに、付設の陳列室を一般に開放した。

考古学研究室は、以上のごとく、中国考古学の草創期に、調査・発掘に先鞭をつけた点など特筆されるべきである。

当研究室の成果・業績としては、『甲骨刻辞』、『封泥存真』、『古明器図録』、『金石書目』、『綴道齋彝器款識考釈』、『藝風堂所蔵金石文字増訂目』、『大同雲岡石刻』、『甘肅調査古物之照像』、『西行日記』などがあるが、『封泥存真』以外は未刊のようである。

(3) 歌謡研究会

1918年2月、蔡元培校長の提唱のもと、北京大学に歌謡征集處が設置され、新聞で全国に歌謡の募集を呼びかけたところ、黒龍江、新疆、熱河を除く各省から、歌謡が寄せられた。それらの歌謡は一部、劉復が「歌謡選」として、全部で148首を『日刊』に掲載した。1920年10月10日、沈兼士、周作人らの主宰により、歌謡研究会が発足し、1922年それは国学門の設立とともにその一部門となり、1922年12月17日『歌謡週刊』が発刊された。寄せられた歌謡は顧頡剛、常恵、魏建功、董作賓らによって編集・整理され、『歌謡週刊』に掲載された。しかし、1925年6月に、97期を以て『歌謡週刊』は停刊した。それまでに掲載されたのは全部で2226首である。その後は『国学門週報』に歌謡を発表する事となるが、その後、軍閥政府による北京大学に対する圧迫、進歩人士への弾圧が、北伐軍の侵攻とともに激化する中、同人の顧頡剛、容肇祖、董作賓らは、次々と北京を離れ南下して、その活動は停滞を余儀なくされる。⁽²⁶⁾一方また、顧頡剛らは広州の中山大学に民俗学会を創設し、『民俗』を創刊して、歌謡を始めとする民俗学の研究はそこで継承された。

なお、1922年12月から1924年5月まで、諸方面の協力を得て収集した、歌謡、諺語、迷語、歇後語は、総計一万千百九十一首であった。それら収集された歌謡、故事は整理を経て、1926年までに、『歌謡叢書』として、『吳歌甲集』、『北京歌謡』、『河北歌謡』、『山歌一千首』、『南陽歌謡』、『淮南民歌』、『昆明歌謡』、『直隸歌謡』の八種、歌謡小叢書として、『看見他』、『北京謎語』、『諺語選録』、『北京歇後語』の四種、故事叢書として、『孟姜女故事歌曲甲集』、『孟姜女故事研究集』の二種にまとめられ、そのうち、『吳歌甲集』、『看見他』、『孟姜女故事歌曲甲集』などが刊行された。

後に、1936年5月、また胡適、周作人、羅常培、顧頡剛らが歌謡研究会と同様の風謡研究会を組織し、それは文科研究所に属し、『歌謡』を復刊し、『新国風叢書』を刊行した。

さて、国学門が歌謡を重視したことに、ここでの国学研究の態度がよく現れている。歌謡はこれまで取るに足らぬ、民衆の歌として知識人には打ち捨てられてきた。中国では古来、詩と文のみが、正統の文学であり、小説・歌謡などは取るに足らぬ異端の文学であるとされてきたのである。それをわざわざ集め保存し研究しようというのは、大変重要な意味を持つ。すなわち、『歌謡週刊』の発刊詞に述べられているごとく、胡適、周作人、顧頡剛らが歌謡を集め研究したのは、無論、学術的興味であろうが、一方で、この歌謡によって、これまでの知識人の正統的・儒教的文学観をもう一度検討して、閉塞したそれとは別の、生き活きとした中国文学の伝統を見つけ出し、そこに、これから興隆するであろう新しい文学の源流を見いだそうとしたのである。つまり、この歌謡研究にも、国学門の研究態度の特徴である、中国文明の再検討しようとする国故整理の姿勢が見えるのである。⁽²⁷⁾

(4) 整理檔案会

1922年5月22日、国学門の導師であった、陳垣の仲介で、教育部歴史博物館に保管されていた旧清朝内閣大庫蔵の、明清二代の檔案（公文書）65箱（1502袋）を当学門に移管し、整理檔案会が設置された。後に、明清史料整理会と改称された。1923年3月中旬から当学門、史学系、中国文学系の教員が共同で学生を動員して整理に当たった。それは、I. 文書の種別分類、朝代（皇帝の代）別分類、II. 事項別に摘録、III. IIに基づき、政治、経済、法律、歴史、風俗的研究の順で行われ、⁽²⁸⁾1924年頃には既にIの分類を終え、IIの分類に取りかかり、たとえば、「明題行稿」は1923年来摘録して『日刊』に掲載された。1926年6月の段階で、『要件陳列室目録』、『明季兵部題行稿摘録彙編』、『九朝京省報銷冊目録』、『清代官印譜』が編集が終了して印刷を待つだけとなっていた。⁽²⁹⁾1933年には、旧清朝内閣大庫蔵の明清二代の檔案（公文書）六十余万件を購入し、これの整理、研究、

刊行作業を開始した。

(5) 風俗調査会

風俗調査会は1923年5月24日に成立した。会の事業としては、書籍の上での研究調査、現地調査、器物の収集を行うこととし、まず張競生教授の考案した調査項目が五十四項目にわたる、当時としては精密な風俗調査票を作り、それを用いた調査を休暇時に帰郷する学生の協力を得て行った。⁽³⁰⁾ 1924年の1月には、各地の新年の風俗を代表する物品、たとえば、神紙、春聯、年画、花紙（年画の一種）などを一般から募集し、また、風俗関係の器物を収集して、それらを陳列室に収め、将来は風俗博物館の設置する計画を持っていた。また、北京の妙峰山、東嶽廟、白雲觀、財神殿の香会（寺廟の参脂ための講）の風俗を現地調査し、⁽³¹⁾ 後に妙峰山については報告書『妙峰山』が出版された。

歌謡同様、いままで一顧だにされなかった、風俗に国学門が注目したのも、歌謡同様、旧来の文明觀を再検討し、新しい文明觀を構築するための国故整理に他ならなかったのであろう。

(6) 方言研究会

1924年1月26日、歌謡を収集・整理している中で、方言研究の必要が痛感されたので、設立され、⁽³²⁾ 先ず林語堂が、劉復帰国後は彼が主宰し、魏建功が助教を務めた。

その事業としては、I. 講演による啓蒙、II. 調査、III. 研究を行った。Iとしては、林語堂が同年3月から5月にかけて、「標音原則」という題で、林の試案の方音字母について講演をし、それを『日刊』、『歌謡週刊』、北京・上海の新聞に発表した。IIとしては、林が講演中に、聴講者からこの方音字母を使って15種類の語について、各地の方音（方言音）を採取したのを始め、⁽³³⁾ 1926年、フランス留学を終え帰国した劉復が、中国文学系と共同で語言樂律實驗室を設け、実験機器によって四声を記述したことなどがある。

当時、資金、人員の関係から大規模な調査は当時不可能であったようである。IIIとしては、劉復の後を受け継いだ、羅常培が、A：全国の方言音を調査して、実験機器を用いて各声調の声調曲線及び図表を作成する、B：中国の古音韻及び方言音の調査、整理研究を計画した。この会での成果としては、劉復には、『中国俗曲総目稿』、『十韵彙編』、魏建功には、『古音系研究』、『方言研究』、羅常培には、『廈門音系』、『唐五代西北方言』などがある。

(7) その他の事業

国学門全体の事業として、通信員制度と月講（毎月の公開講演会）とがある。

通信員とは海外の中国学者と交流を国るために、かれらを招聘することである。この通信員には、たとえば、フランスの敦煌学の大家ペリオ、ソ連の西夏研究の大家イヴァーノフ、日本の朝鮮史の大家今西龍、東洋美術史の大家沢村専太郎、東洋音楽史の大家田辺尚雄など、錚々たる人々がいたのである。

国学門では、学術の普及を図るため、当学門の関係者による学術講演会を毎月一回行った。これを月講という。たとえば、1927年の3月から6月までの、講演予定者、講演題目によって一例を示すと、3月は陳垣の「回教進中国的源流」、4月は劉復の「従五音六律説到三百六十律」、5月は馬裕藻の「戴東原對於古音学的貢獻」、6月は沈兼士の「求語根之一個方法」である。⁽³⁴⁾

四、国学門の定期刊行物

国学門では、創立以後、『歌謡週刊』、『国学季刊』、『北京大学研究所国学門週報』、『北京大学研究所国学門月刊』の四種の定期刊行物を刊行した。

(1) 『歌謡週刊』

既に、三、「国学門の研究部門とその事業」の(3)「歌謡研究室」で述べたごとく、北京大学の歌謡研究は1918年の全国からの歌謡募集に始まり、1920年冬には、周作人らの手で歌謡研究会が誕生し、国学門設立とともに、当研究会が、その一部門となる。そして、1922年12月7日、全国から寄せられた歌謡を発表し、また歌謡、民俗の研究論文を発表するために、この『歌謡週刊』が創刊された。編集は、顧頡剛、常恵、魏建功、董作賓らによって行われた。しかし、国学門では、他の研究室の成果を発表すべく、『歌謡週刊』の誌面を拡充して『北京大学研究所国学門週采』を創刊する準備をしており、そのため、『国学門週采』の創刊に合わせて、『歌謡週刊』を、1925年6月28日、九十七期を以て停刊とした。ここに発表された歌謡は総数2226首であった。その後、収集された歌謡や、歌謡の研究は、『国学門週采』にも継続して発表された。後、1936年4月4日に『歌謡』という名で復刊されるが、⁽³⁵⁾1937年6月26日第三卷十三期を以て停刊された。この『歌謡週刊』は、中国で最初の民俗学の学術雑誌として注目されるべきである。

(2) 『国学季刊』

『国学季刊』は、同編輯委員会によって編集される、北京大学直屬の定期刊行物であり、当学門の直接の定期刊行物ではないが、「季刊編輯略例」によれば、投稿原稿は、国学門に郵送することになっており、その事務がそこで行われ、また編集委員会のメンバーは過半は当学門のメンバーが占めているので、国学門の定期刊行物に準じたものとして見てよい。

『国学季刊』は1923年1月に創刊され、1951年1月第七卷二号まで刊行された。第一卷は一号から三ヵ月ごとに季刊で出版されているが、第二卷は、一号が1925年12月、二号が1929年12月、三号が1930年9月、四号が1930年12月、と不定期になる。第三卷からは、またほぼ季刊のペースで出版されているが、1936年、第六卷二号で停刊し、抗日戦争終結後、1950年7月、第七卷一号を刊行して復刊し、1951年7月、第七卷二号を以て終

刊となる。

編輯は、初め胡適が主宰していたが、第三卷第一号（1932年3月）から魏建功が主編となった。

論文の数では、言語文字学の論文が最も多く、次いで、考古学、歴史学の順で多く、経学関係の論文は僅か三編のみである。

旧来の国学の範囲は、当時の国学雑誌を見れば分かることなのだが、概ね経学を中心に、諸子学、史学、詩文、小学、金石学などまでであったが、『国学季刊』には、たとえば、劉復の「実験四声変化之一例」（第一卷第三号）のように、小学ではなく言語学の論文、たとえば、袁復礼の「記新発見的石器時代の文化」（第一卷第一号）のように、金石学ではなく考古学の論文、たとえば、黄文弼の「高昌疆城郡城考」（第三卷第一号）のように、辺境の歴史を対象にした論文、孫楷第の「唐代俗講之科範與体裁」（第六卷第二号）のように、詩文ではなく俗文学をテーマとした論文など、旧来の国学の範疇からはみ出してしまふものがかかりある。言わば、『国学季刊』での国学とは、中国の伝統文化全てを包含するものであった。それにはこれまで俗なもの、異端なものとして蔑されてきた歌謡、白話小説をも入っている。つまり、胡適が『国学季刊』の発刊詞「『国学季刊』発刊宣言」で既に述べているような、国学の領域の拡大がなされているのである。これは、国学の定義を革命的に変えたものと、言わなければならない。また、その研究方法にも、他の国学雑誌と大きな違いがある。それは、論述が極めて体系的、客観的であることである。執筆者の多くは、たとえば胡適、錢玄同、劉復、林語堂を始め自ら、欧米や日本で近代的科学的学問方法を身につけてきたか、または、顧頡剛、魏建功、羅常培、黄文弼など、それらの人々を師とした人々で占められているためであろう。更に、旧来の国学に見られる道学臭が全くない点にも、当時の新国学の姿を極めて如実に表していると言えよう。

(3) 『北京大学研究所国学門週葉』

1925年10月14日に創刊され、1926年8月18日に第二巻第二十四期を以て廃刊された。創刊号の「縁起」に拠れば、国学門の陳容が充実してきたにもかかわらず、その成果を發表する紀要が、小冊の『歌謡週刊』しかなく不都合なので、『歌謡週刊』を拡大する形で『週葉』が創刊された。

しかし、第二巻十八期に本刊啓事として、校費不足のため、編集は、これまで通り、国学門が行うが、上海開明書店に印刷・発行を委託したことが通知され、更に第二巻二十四期に本刊特別啓事として、内容を充実させ、また週刊では期日通りに刊行できないため、1926年10月から月刊に改めることが通知された。編集は、魏建功、顧頡剛によって行われた。⁽³⁶⁾

『国学門週葉』の特徴は、『歌謡週刊』を受け継いだからでもあろうが、たとえば「孟姜女故事研究」、「陸安伝説」などのように、歌謡・伝説に関する研究、資料紹介が圧倒的に多く、次に魏建功の「呉歌声韻類」などのような言語学の論文が多いことである。その他に、鍾敬文の「汕尾新港渔民調査」のような風俗調査の論文、経学を対象とする論文ではあっても、顧頡剛の「論詩経所録為楽歌」のような疑古派の辨偽の論文があることも特徴的であり、所謂既に述べたような、旧来の国学の範疇に入るものは極めて少ない。ここからも、国学門に集う人々が、国学の領域を拡大し、その研究方法を新しくしようとしていることが窺えよう。

(4) 『北京大学研究所国学門月刊』

『週葉』を継承し、1926年10月20日に、創刊され、1927年11月20日に第一巻第八期を以て廃刊された。印刷・発行は『週葉』と同じく上海開明書店に委託し、編集は、魏建功、馮淑蘭(沅君)が担当した。⁽³⁷⁾

『国学門月刊』の特徴は、ほぼ『国学門週葉』と同じであるが、考古学関係の論文がそれよりは多いという点に違いがある。ここに掲載された論文の中で、陸侃如が翻訳した、方法論的にもしっかりした、カールグレン

の『論左伝之真偽及其性質』は当時、極めて学界に影響を与えた重要なものである。

以上、四種の国学門の定期刊行物を見るに、これらの雑誌、また国学門の人々が目指す国学というものが、旧来の国学とは全く異なり、その範囲は全ての中国伝統文化に関するものであり、その方法は極めて科学的近代的になっていることがわからう。

五、研究生制度

研究所国学門は、「一、国学門の沿革」で既に述べた如く、研究生を採用して、彼らに専門的学問を身につけさせ、学者として養成することが、本来の設立の重要な目的であった。

① 研究生

「国立北京大学研究所国学門研究規則」に拠れば、北京大学卒業生で専門の研究を志し、その能力が有る者または、在校生または学外の学者で、特別の研究で既に実績のある者は、当学門登録室で氏名及び研究題目を提出し、著作のあるものは著作も提出し、当学門委員会の審査を経て、合格となったものが研究生となることができる。研究生は本学門委以または導師の中から、一人或いは二人の顧問導師を選び、その指導を受ける。卒業生、学外者で来校の不可能なものは、通信研究を認めるというものであった。

国学門は、研究生には極めて自由放任であり、研究生は、研究の題目を提出し、期限までにその研究を行い、研究経過を随時報告するほかは、研究が完成したときにその業績を届け出るぐらいで、後は皆研究生に任されている。そのような自由な雰囲気のもと、研究生は存分にそれぞれの才能を發揮したのだろう。この研究生の中から、後に各分野の大家として活躍する、古典文学の馮沅君、陸侃如、文字学の商承祚、容庚、考古学の董作

賓、歴史学の鄭天挺、思想史の容肇祖などが多数の逸材を生んだことからそのことは頷ける。

なお、研究生の数は1922年11名、1923年は10名で、半数は北京大学の在校生・卒業生で占められていたが、他大学卒業生にも門戸が開かれていた。⁽³⁸⁾ また、大学卒乃至大学在学でなくとも、その資質ありと判断された場合は、委員会の審査を経て、研究生となることができた。たとえば、考古学者として高名な董作賓は学歴は僅かに師範学校しか卒業していなかったが、研究生となり、ここから学者として巣立っていったのである。国学門は資質のある人にはいかに公平であったことがわかる。

② 導師

研究生は沈兼士、馬衡、馬裕藻、劉復、朱希祖、周作人、錢玄同、沈尹默など北京大学の専任、講師が分担指導し、他に、学外から招かれた当代の著名学者、文字学の羅振玉、文史哲兼学の王国維、歴史学の陳寅恪なども、その指導に当たった。

たとえば、学外の導師が、学生募集をする場合は、『日刊』で、その研究題目を学生に通告し、有志の者が国学門へ研究生の手続きを取り、導師の許可を得、更に国学門委員会を得て研究生となり、指導を受けることとなっていた。指導は、手紙で行われることもあったようである。⁽³⁹⁾ たとえば、王国維が学生に示した研究題目は「(1)詩書中成語之研究、(2)古字母之研究、(3)古文字中聯綿字之研究、(4)共和以前年代之研究」(1923年)⁽⁴⁰⁾であり、陳寅恪が学生に示した研究課題は「(1)長慶唐蕃會盟碑藏文之研究、(2)鳩摩羅什之研究、(3)中国古代文星曆諸問題之研究、(4)搜集滿州文学史材料」(1926年)⁽⁴¹⁾であった。

六、国学門の指導理念

国学門の指導理念は、既に述べた如く、胡適が提唱した国故整理運動に

影響されていると見てよい。そこで、胡適の国故整理の思想を簡単に説明しておく。彼が1919年1月に発表した「新思潮的意義」に拠ると、彼は新思潮的意義」に拠ると、彼は新思潮の目的は新たに文明を創り出すことといい、その手段として、問題を研究し、学理を輸入することとし、旧来の學術思想については、国故整理を主張している。この国故整理とは、即ち批判的態度、科学的精神で、旧来の學術思想を一つ一つ、国粹と国渣に辨別することである。つまり、旧来の學術思想の一つ一つの価値を再検討することである。そして、再検討された国故と、外国から輸入した、問題を研究するための学理とによって新たに文明を創り出そうとしたのであった。このような作業は、中国が近代国家となるためには、通らねばならない道のりであると彼は考えたのである。このように、彼の国故整理の思想は、彼の文明論、近代化論と分かちがちい。更に、彼は1923年1月に発表した「『国学季刊』発刊宣言」のなかで、国故整理については、更に、一、歴史の見方によって国学の研究領域を拡大させる、二、系統的整理で国学研究の資料を部門別に分類する、三、比較研究で国学の資料の整理と解釈を助けるとまとめたのである。

既に、第三章第二節「研究部門とその事業」、第四章「国学門の定期刊行物」で述べたごとく、国学門では、国学の領域が、歌謡、伝説、風俗、方言、考古学と拡大されていった。これは胡適の言う、「歴史の見方によって国学の研究領域を拡大させる」ことである。また、歌謡、伝説、風俗、方言は、これまでの中国の文明では、否定的なものばかりであったが、国学門の人々がそれを評価しなおし、それらに、これまで隠されていた、中国の優れた伝統を見いだそうとしていた。これは胡適の言う、旧来の學術思想の一つ一つの価値を再検討することであり、また、彼の目指した、新たに文明を創り出すことに他ならなかった。

かくの如く、国学門の人々に対する胡適の影響力は、大きかったのだ

る。

七、国学門の役割

既に、見てきたように、国学門は、1925年9月、清華学校研究院が設立されるまでは、中国で唯一の国学研究者養成機関として、多くの学者を養成し、また1927年11月中央研究院歴史語言研究所が設立されるまで、国学研究におけるナショナルセンターとして学者に研究の機会を与えてきた。この点で、国学門は中国の近代の国学研究において、極めて重要な役割を果たしたと言える。また、その中心となったメンバーが、たとえば、胡適、顧頡剛などが国故整理運動の推進者であったために、自ずと国学門からその運動、その方法論を全国に広めることとなった。実際的には、国学を、従来の道学臭く、經学を中心とした極めてその領域の狭隘なものから、体系的で、中国の文化の全領域を含む、多種多様な豊かなものへと、人々にその概念を一新させたのである。国学門が、特に、それまで、中国では、看過されてきた風俗研究、歌謡研究などの民俗学研究の普及に大きく貢献したことは言うまでもない。即ち、中国伝統学術の近代化に大きな役割を果たしたとって過言ではなからう。

八、おわりに

本稿では、当時国学門がどのような研究機関であり、また変革期の国学の世界で、どのような役割を果たしたのかということをおざなりに過ぎない。各人の学問の方法論についてはほぼ触れずに終わった。また、胡適の国故整理の思想には、ここでは述べなかったが、また根本的問題も存在する。それらは今後の機会を待つこととする。

〔注〕

- (1) 国学という語がいつごろから使われはじめるかは、よくわからないが、『中国文雑誌・新聞総合目録』（アジア経済研究所、1986年）に拠れば、国学の名を冠した雑誌で最も古いものは『国学萃編』で、1908年に創刊されており、また、『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』に拠れば、国学の名を冠した書籍で最も古いものは、劉師培の『国学發微』で、1905年に刊行されており、大体、清末には国学という語が使われていたであろう。
- (2) 経学の変容には、康有為らによる孔教運動のような、経学の最後のあがきとも言うべきものもあるが、ここでは、伝統学術が国故整理派によって近代的学問としてどのように変容させられていくか、その過程に専ら筆者の関心がある。
- (3) 中国を代表する思想家李厚沢が中国の近代化を論ずるのに先ず、「孔子再評価」（『中国古代思想史論』、人民出版社、1986年）から始めねばならず、また、1987、8年に近代化論議と共に、伝統再評価の文化熱（文化ブーム）がおこったことに、それは象徴される。
- (4) 日本では、増淵達夫、「現代中国史学界における古史研究の問題傾向」（『一橋論叢』第17巻第3・4合併号、1947年）、貝塚茂樹『中国古代史学の発展』（『貝塚茂樹著作集』第4巻、中央公論社、1977年）、小倉芳彦『抗日戦下の中国知識人一顧頡剛と日本』（筑摩書房、1987年）、がある。中国では、吳沢「『五四』前後『疑古』思想的分析和批判」（『歴史教学問題』1959年第4期）があり、これまでの中国の代表的な、否定的評価を示す。80年代以降には、楊向奎「論古史辨派」（『中華學術論文集』、中華書局、1981年）があり、当時の中国での学問研究の自由化路線を反映してか、かつて古史辨派に属していた著者が、実証的に古史辨派の理論、役割を論及している。
- (5) 吉川幸次郎「留学時代」（『吉川幸次郎全集』第22巻所収、筑摩書房、

- 1975年)、倉石武四郎『中国語五十年』(岩波新書、1973年)などがある。
- (6) 『北京大学日刊』(以下『日刊』と略称する。)1925年6月27日付の雑録に、蔡元培の「『北京大学研究所国学門一覽』序」があり、『北京大学研究所国学門一覽』が刊行されたようだが、筆者は未見である。
- (7) 『国学門週報』の揃いを所蔵する機関は、東京大学付属図書館と東洋文庫のみであり、『国学門月刊』の揃いを所蔵する機関は、国会図書館、東京大学東洋文化研究所付属東洋学文献センター、東洋文庫、京都大学付属図書館、京都大学人文科学研究所である。
- (8) 『国学季刊』は1967年2月に台湾学生書局から、『歌謡週刊』は1985年11月に中国民間文芸出版社から、それぞれ影印された。
- (9) 「研究所国学門啓事」(『日刊』1922年1月17日)
- (10) 「国立北京大学研究所組織大綱」1921年12月14日公布
- (11) 蔡元培「『北京大学研究所国学門一覽』序」(『日刊』1925年6月27日)
- (12) 小林善文「北京大学と軍閥」(『史林』第66巻第3号、1983年)
- (13) 三・一八の惨劇後、北京大学の教授たち、たとえば、国学門に関係のある馬裕藻、陳垣などに、逮捕令が出た。(『北京大学校史(1898~1949)増訂版』)また、顧頡剛は1926年秋に、身の危険を感じてまず廈門大学へ逃れ、翌年には広州の中山大学へ移った。
- (14) ここまでの北京大学機構の沿革に関わる記述は『北京大学校史(1898~1949)増訂版』に拠る。以下、国学門についても、注記のない場合は、本書に拠る。
- (15) 「研究所国学門通告」(『日刊』1923年11月27日)に二院から三院へ移転したことが通告されている。また『国学季刊』第五巻第一号の奥付に文科研究所の所在地が第一院となっている。
- (16) 国立北京大学研究所組織大綱」1921年12月14日公布
- (17) 「国立北京大学研究所国学門重要記事」(『国学季刊』第一巻第一号[1923

- 年1月] ~第二卷第一号 [1925年12月])
- (18) 「国立北京大学研究所国学門報告」(『国学季刊』第二卷第一号、1925年12月)
 - (19) 「本学門開辦以来進行事業之報告」「乙、編輯室」(『国学門週采』第二卷第二十四期、1926年8月11日)
 - (20) 『中華民國文化史』第七章第四節「二、科学考古学的誕生」(吉林文史出版社、1990年)
 - (21) 「国立北京大学研究所国学門重要記事」「C、考古学研究室」「四、古蹟古物調査会」(『国学季刊』第一卷第三号、1923年7月)
 - (22) 『中華民國文化史』第七章第四節「二、科学考古学的誕生」(吉林文史出版社、1990年)
 - (23) 「国立北京大学研究所国学門重要記事」「C、考古学研究室」(『国学季刊』第一卷第四期、1923年12月)
 - (24) 「本学門第三次懇親会紀事」(『週采』第一卷第三期、1925年10月11日)
 - (25) 「研究所国学門委員会致内閣の公函」(『日刊』、1923年9月26日)
 - (26) 胡適、「『歌謠』復刊詞」(『歌謠』創刊号、1936年4月4日)
 - (27) 「発刊詞」(『歌謠週刊』創刊号、1922年12月17日)「本会蒐集歌謠的目的共有兩種、一是學術的、一是文芸的、……所以這種工作不僅是在表彰現在隱藏著的光輝、環在引起当来的民族的詩的發展：這是第二個目的。」
 - (28) 「国立北京大学研究所国学門重要記事」「(8)整理清内閣檔案之始末」(『国学季刊』第一卷第一号、1923年1月)
 - (29) 「本学門開辦以来進行事業之報告」(『国学門週采』第二卷第二十四期、1926年8月18日)
 - (30) 「国立北京大学研究所国学門重要記事」、D、風俗調査会」(『国学季刊』第一卷第三号、1923年7月)
 - (31) 「本学門開辦以来進行事業之報告」(『国学門週采』第二卷第二十四期、

1926年8月18日)

- (32) 「北大研究所国学門方言調査会宣言」(『日刊』1924年3月17日付、第一面「専件」)
- (33) 「本学門開辦以来進行事業之報告」(『国学門週葉』第二卷第二十四期、1926年8月18日)
- (34) 「學術消息」(『国学門月刊』第一卷第五期、1927年2月20日)
- (35) 胡適、「『歌謡』復刊詞」(『歌謡』創刊号、1936年4月4日)
- (36) 「広告」、(『日刊』、1926年7月31日、第二面)
- (37) 同上
- (38) 「国立北京大学研究所国学門報告」「關於研究生之事務報告」(『国学季刊』第二卷第一号、1925年12月)
- (39) 「国立北京大学研究所国学門重要紀事」(『国学季刊』第一卷第一号、1923年1月)
- (40) 「国立北京大学研究所国学門重要紀事」「研究所国学門關於學術之通信」(『国学季刊』第一卷第三号、1923年7月)
- (41) 「研究所国学門通告」(『日刊』1926年12月6日)

付 録

『北京大學研究所國學門週葉』、『北京大學研究所國學門月刊』 総目次

凡 例

- ◎ 漢字は一部、印刷の関係から常用漢字体とした。また學術界消息及び通訊(通信)は、目次には細目のないものもあるが、読者の利便を考え、補った。
- ◎ 論文の著者名は、名のみの場合は姓を、筆名の場合は姓名を、出来る

限り（ ）で示した。

『北京大學研究所國學門週報』 総目次

第一卷第一期 1925年10月14日

春秋與孔子	(錢) 玄同 (顧) 頡剛
吳歌聲韻類	魏建功
說文解字段氏注摘例序	沈兼士
孟姜女故事研究(10)	顧頡剛
孟姜女故事研究的第二次開頭	
歌曲 九、新編孟姜女五更調	
十、新刻孟姜女十二月花名全本	
補歌曲二的樂譜	

啓事

陸安傳説 (一)	靜 聞 (鍾敬文)
一句成語在元曲中之發見并質疑	鄭賓于 陳垣
西行日記 (一)	陳萬里
清太宗聖訓底稿殘本 (附校勘記)	胡鳴盛

第一卷第二期 1925年10月20日

漢司空袁敞碑跋	馬 衡
漢初儒法之爭	胡 適
孟姜女故事的研究 (11)	
論文	

孟姜女在元曲選中的傳説	劉賓于
案語（范杞梁的死法）	顧頡剛
通訊	
22. 懊儂歌中的崩城	鍾敬文
23. 曹娥江鐵橋領傳説	何植三
山東泰安歌謠	盧逮曾
陸安傳説（23）	靜 聞（鍾敬文）
西行日記（二）	陳萬里
清太宗聖訓底殘本（二）	胡鳴盛
第一卷第三期	1925年10月28日
嫩煌掇瑣叙目	劉 復
在開羅萬國地理學會演説	（Paul Pelliot）伯希和
孟姜女故事的研究（12）	
通訊	
24. 安肅縣的浣衣塘	沈兼士
25. 瑤玉集中的杞良妻滴血	程樹德
26. 綏中縣的孟姜詞	程樹德
27. 擋小填河口的故事及其他	崔濱汀
28. 漢口的五仙女臨凡劇	甯 恕
29. 萬喜良的石像	錢肇基
祝英臺的歌	（馮）沅 君
西行日記（三）	陳萬里
清太宗聖訓底稿殘本（三）	胡鳴盛
”到底怎麼樣？”（方言調查）	

本學門懇親會紀事

第一卷第四期 1925年11月4日

參觀朝鮮古物報告	馬 衡
跋郎花玉刻本墨子	胡 適
我的求學經過及將來工作	劉 復
括蒼畬民調查記	沈作乾
孟姜女故事 (13)	
通訊	
30. 廣列女中的杞植妻和杞梁妻	鄭孝觀
31. 福州儒家班演唱的孟姜女	段井心
32. 孟姜女故事與美孟姜歌	谷鳳田
啓事 (贈件誌謝)	
淮南民歌	臺靜農
陸安傳說 (4,5,6)	靜 聞 (鍾敬文)

第一卷第五期 1925年11月11日

楊朱傳略	鄭賓于
鄭樵詩辨妄輯本	顧頡剛
紅樓夢的本子問題質胡適之俞平伯先生	容 庚
括蒼畬民調查記	沈作乾
西行日記 (四)	陳萬里
清太宗聖訓底稿殘本 (四) (附校勘記)	胡鳴盛
學術界消息	

風俗調査會徵求舊本燒餅歌

考古照片展覽

第一卷第六期 1925年11月18日

非詩辨妄跋	顧頡剛
老子韵例初稿	(馮)沅君
讀陳垣氏之元西域人華化考	桑原隲藏
紅樓夢的本子問題質胡適之俞平伯先生(二)	容庚
奴才(寧遠堂叢錄)	陳垣
關於中國方言之分類之討論	鍾敬文 毛坤
漢初儒法之爭	吳承任
學術界消息	
研究中國語言文字的新組織	
寫本劇曲鼓兒詞的收藏	
類書引用書細目將單獨印行	
朝鮮古物中漆器題銘之發見	

第一卷第七期 1925年11月25日

述復社	容肇祖
“唐晡”與“諸娘”	董作賓
孟姜女故事的研究(14)	
通訊	
33. 膠東道的孟姜女故蹟	馬祥符
34. 福佬民族的孟姜女傳說及其他	鍾敬文

西行日記 (五)	陳萬里
清九朝京省報鎖冊總目	明清史料整理會
音韻識小錄 (一)	魏建功
歌謠的原始的傳說	尚 鉞
學術界消息 (二則)	
清華研究生之統計	
本學門研究生之統計	
本學門通告	

第一卷第八期 1925年12月2日

梁山伯祝英臺故事	錢南揚
述復社 (完)	容肇祖
孟姜女故事的研究 (15)	
通訊	
35. 哭泉孟姜女祠記剛其他	鄭孝顥
淮南民歌 (二)	臺靜農
諾皋說	吳承任
武科 (寧遠堂叢錄)	陳垣
清太宗聖訓底稿殘本 (五) (附校勘記)	胡鳴盛
關於數人會	疑古 (錢) 玄同
學術界消息三則	
燉煌經籍輯存會的組織	
端匄齋所藏古物轉售他人	
張伯英先生將所藏碑帖讓歸國有由歷史博物館	

第一卷第九期 1925年12月9日

新韵建議	林語堂
新韵例言	林語堂
華長忠の韻籟	魏建功
殮玉鎮胸の又一證	裘善元
紅樓夢の本子問題質胡適之翁平伯先生 (三續)	容 庚
孟姜女故事の研究 (16)	
通訊	
36. 乾城歌關中の孟姜女哭長城	谷鳳田
37. 上海城牆内の范喜良石像	郭紹虞
38. 目蓮戲與四明文戲中の孟姜女	錢南揚
西行日記 (六)	陳萬里
學術界消息三則	
本所出版叢書之計畫	
達古齋贈本學門端氏所藏磚石拓本日	

第一卷第十期 1925年12月16日

論詩經所錄全爲樂歌 (上)	顧頡剛
吳歌聲韻類 (二、韻類)	魏建功
祝英臺與秦雪梅	黃 樸
陸安傳說	靜 聞 (鍾敬文)
7. 牛郎和織女	
8 老虎外婆	
清太宗聖訓底稿殘本 (附校勘記)	胡鳴盛

學術界消息

影攝唐寫本說文

第一卷第十一期 1925年12月23日

論詩經所錄全爲樂歌（中）

顧頡剛

吳歌甲集序

沈兼士

紅樓夢的本子問題質胡適之俞平伯先生（四）

容庚

山東中部的傳說—土地爺

盧逮曾

本學門所藏清代昇平署劇本目錄（一）

學術界消息

本學門叢書預備付印二十一種專門書目的編了

第一卷第十二期 1925年12月30日

論詩經所錄全爲樂歌（下）

顧頡剛

吳歌聲韻類

魏建功

胡中藻詩案（寧遠堂叢錄）

陳垣

俄國學者的生活及其他（演說）

陳啓修

學術界消息

(1) 本學門同人歡迎李·陳二教授茶話會紀事

(2) 克里米亞發掘批古墓

第二卷第十三期 1926年1月6日

一九二六年始刊詞

顧頡剛

吳歌聲韻類	魏建功
漢魏王印攷	方濬益 容 庚
中秋日故事的傳説	冰 魚
山東の近世歌謡	谷鳳田
穀壁考	容 易
李仲揆教授在本學門茶話會演説	魏建功 記
本學門所藏清代昇平署劇本目錄（二）	
學術界消息 二則	
俄國發現二千年前遺骸	
唐寫本説文將歸日人	

第二卷第十四期 1926年1月13日

西漢經師傳授系統表	徐炳昶
唐寫本切韻殘卷跋	丁 山
説“畚”（閩音雜記之二）	董作賓
孟姜女故事的研究（17）	
歌曲	
11. 寧波新刻孟姜女五更調	
12. 廈門御前清曲中孟姜女曲五闕	林語堂 注
潮州的民間傳説（二則）	章雄劍
崔鶯鶯的故事	谷鳳田

第二卷第十五・十六期合冊 1926年 月 日

説文證史討論號

- 一、論以說文證史必先知說文之誼例 柳詒徵
- 二、答柳翼謀先生 顧頡剛
- 三、與顧頡剛先生論說文書 疑古(錢)玄 同
- 四、新史料與舊心理 魏建功
- 五、論說文誼例代顧頡剛先生答柳翼謀先生 容 庚
- 六、附錄
- (1) 說文讀若考例言 方 勇
- (2) 田潛一切經音義引說文箋
- (3) 說文古文考
- (4) 唐寫本說文本部

第二卷第十七期 1926年2月3日

- 琵琶及他種弦樂器之“等律”定“品”法 劉 復
- 八排探猿記談(風俗) 張景良
- 泰安歌謠又九首 李嘉普
- 乾隆四十八年九月紅本處查辨應燬書目 王光瑞

第二卷第十八期 1926年7月7日

- 中國北方有史後無犀象考 章鴻釗
- 易韻列初稿 (馮) 沅 君
- 釋笏 丁 山
- 福州蠶戶調查記 劉松青
- 本學門所藏清代昇平署劇本目錄
- 學術界消息

清華研究院研究生範圍之統計

第二卷第十九期 1926年7月14日

秦三十六郡考	朱 儼
易韻列初稿	(馮) 沅 君
泰安高里山神祠的七十五司和北京東嶽廟的七十二司	廬逮曾
浙江嵯縣歌謠	章煥文
陸安傳説與寧波傳説之比較	桑洛卿
“西行日記”中之討論 (通信)	崔盈科
本學門所藏清代昇平署劇本目錄	

第二卷第二十期 1926年7月21日

畚語十八名	董作賓
記廖燕的生平及其思想	容肇祖
蛤化石小記	崔盈科
陸安傳説	靜 聞 (鍾敬文)
一個不識字的女作家的幾首唱歌	卜汝成
本學門所藏清代昇平署劇本目錄	
坤甯宮與吉黑兩省風俗	馬汝邴

第二卷第二十一期 1926年7月28日

讀西漢經師傳授系統表	楊樹達
記廖燕的生平及其思想	容肇祖

馬哥孛羅與道教 陳仲益
陸安傳說 靜 聞 (鍾敬文)
吃西瓜的故事 曹 云

第二卷第二十二期 1926年 8 月 4 日

讀抱朴子 (上篇) 容肇祖
汕尾新港蛋民調查 (鍾) 敬文

第二卷第二十三期 1926年 8 月11日

讀抱朴子 (下篇) 容肇祖
浙江嵯縣歌謠 章煥文

第二卷第二十四期 1926年 8 月18日

雲南的喪禮 孫少仙
直隸新河舊婚制 傅振倫
搖俗簡聞 劉策奇
搖俗簡聞之二 劉策奇
直隸新河的宗教及雜教談 傅振倫
雲南醫事的歌謠 孫少仙
浙江嵯縣歌謠 章煥文
特重音調之客歌 鍾敬文
新河方言各物中之性屬 傅振倫
劉三姐的故事 劉策奇

顔神の傳説	谷鳳田
直隸南部土地爺の傳説	張仲毅
本學門開辦以來進行事業之報告	

『北京大學研究所國學門月刊』 総目次

第一卷第一号 考古學專號 1926年10月20日

甲 宗教美術 (一) 壁畫	
山西壁畫七佛像題辭	葉 瀚
山西興化寺壁畫名相攷	黃文弼
關於壁畫之討論	易培基 黃文弼
壁畫攷語跋	馬 衡
乙 宗教美術 (二) 造像碑及經幢	
魏李相海造象碑跋	馬 衡
保定蓮花池六幢考	鄭賓于
保定蓮花池六幢考跋	馬 衡
關於河南沁陽九十人造象碑之通信	何植三 馬 衡
丙 古代器物	
樂浪遺跡出土之漆器銘文	日本 內藤虎次郎 著 容 庚 譯
樂浪遺跡出土之漆器銘文考	容 庚
關於朝鮮樂浪古墓發掘之通信	原田 淑人 馬 衡
丁 古代語音	
致讀者	魏建功
古音學上之大辯論	魏建功
附録 關於古音學大辯論的論文 (五篇)	汪榮寶

專 載

懇親會紀事

插 圖

河南沁陽九十人造象碑

山西興化寺壁畫 (三幅)

樂浪出土之漆器

第一卷第二號 1926年11月20日

詩經是不是孔子所刪定的	張壽林
楚辭之祖禰與後裔	(馮) 沅 君
春秋天王贈仲子非禮辨	李嘉善
楊朱巧再補	唐 鉞
楚辭韻例	(馮) 沅 君
吳歌聲韻類	魏建功
千字文院本之前後	錢南揚
讀筆生花雜記	(馮) 沅 君
吳歌與山東歌之轉變	谷鳳田
吳歌與山東歌之轉變附記	魏建功
論近世歌謠	谷鳳田
山東的歌謠	谷鳳田 錄
浙江嵯縣歌謠	章煥文
花缸曲	宋培坤 輯
一根長槍	郭全和
諸葛亮的故鄉	李嘉善

劉爺與劉爺廟	鄭賓善
關於劉守眞的傳説掇拾	王家賓
通信	牛聚五 魏建功
最後一頁	

第一卷第三號 1926年12月20日

論三百篇後的風詩問題	劉賓于
論詩辨說一寫在“三百篇後的風詩問題”之後	劉賓于
南宋詞人小記二則	(馮) 沅 君
玉田先生年譜擬稿	
玉田家也與其詞學	
張鎡傳略 (附錄)	
帝與天	劉 復
讀‘帝與天’	魏建功
梁山伯祝英臺的故事	錢南揚
南陽故事	趙芝庭
陸安傳説寧波傳説與常州傳説之比較	劉充葆
老醜虎	漱 巒 (馮沅君)
陸安傳説	靜 聞 (鍾敬文)

第一卷第四號 1927年 1 月20日

公孫龍考	劉賓于
南宋詞人小記	(馮) 沅 君
草窗年譜擬稿	

草窗朋輩考	
草窗詞學之源淵	
五胡十九國興亡表	李嘉善
五胡十九國世表	李嘉善
史記田敬仲家中驕忌的段話	大 任
詞選箋自序	陸侃如
唐河的傳說	漱 巒 (馮沅君)
淮南情歌三輯	(臺) 靜 農
江蘇謠歌選	
學術消息	
(一) 中國圖書志編纂	
(二) 泉州各古蹟之發現	
(三) 陳援菴先生關於史學的名著 (國立北京大學研究所國學門自著叢書『二十史朔閏表』『中西回史日曆』)	
(四) 介紹一部研究中國古代禮俗的新書	
研究所國學門通告	
十三經注疏引用羣書總目及び十三經注疏引用羣書綱目	

第一卷第五號 1927年 2 月20日

餘姚黃宗羲先生傳纂	謝國禎
老子通詮	譚禪生
讀吳桂華說幽	衛聚生
系統的文字學參考書目舉要	沈兼士
諧聲說	王 力
梁山伯祝英臺故事歌曲序錄	錢南揚
祝英臺故事的歌曲	錢南揚

劉三妹故事與粵風續九及粵風 左天錫
許眞君故事的起源和概略 大 任
淮南情歌三輯（續） （臺）靜 農
江蘇歌謡選 陳德圻
學術消息

大學門“自講”題目

通訊 陳寅恪
北大風俗調查會徵集各地關於舊曆新年風俗物品之証明
北大歌謡研究会徵集全國近世歌謡簡章

第一卷第六號 発行月日明記せず

回回教進中國的源流 （馮）沅 君
中國之銅器時代 馬 衡
宋安州出土古器考 朱希祖
論左傳之眞偽及其性質 陸侃如 衛聚賢
季札觀樂辯 衛聚賢
目連戲攷 錢南揚
淮南情歌 （臺）靜 農
雲南歌謡選 萬邦懷
說文古本攷校勘記
學術消息

中西人合組西北科学攷查團

本學門歡送西北攷查團紀事

新出塞曲

本刊叢書

本所新取錄之研究生

第一卷第七・八號 1927年11月20日

西域記釋地	陳仲益
論左傳之真偽及其性質	陸侃如
跋	衛聚賢
貨幣源流攷	吳桂華
釋名釋 (卷第一)	丁丁山
釋名釋說明書	丁山提
濟寧城隍出巡考	谷鳳田
淮南情歌三輯 (專集續)	(臺) 靜 農
廣東歌謠選	
龍巖縣的風俗	溫壽鍾
說文古本攷校勘記 (續四期)	編輯室
清代昇平署戲劇十二種校刊記	劉澄清
學術消息	
一、王靜安先生著作詳目	
二、燕京學報	
三、西北科学攷查團消息	